

東北文教大学・東北文教大学短期大学部 図書館報

発行 東北文教大学・東北文教大学短期大学部附属図書館 〒990-2316 山形市片谷地515 ☎023-688-7544

目次

- 静寂とワイワイ ー 反対のように見えるものをつなげる 1
- 私のおすすめ本 3
- 平成26年度 図書館報告 4

静寂とワイワイ ー 反対のように見えるものをつなげる

附属図書館長 熊谷義隆

…ノートとインクの匂い

イメージといえば聞こえは良いが、強固に結びついて固定観念のように連想してしまうものがある。いささか品がないけれど、パチンコ屋といえば「軍艦マーチ」。夏といえば甲子園、「雲は湧き、光あふれて…」と「ああ、栄冠は君に輝く」が浮かんでくる。「軍艦マーチ」などもう古い、「六甲おろし」はどうした、というお声が聞こえてきそうであるが、そこが固定観念の恐ろしさで、抜けがたくしみ込んでしまっている。

図書館にも同じようなイメージがあって、ペギー葉山さんが歌った「学生時代」の一節がすぐに浮かんでくるのである。

秋の日の図書館の ノートとインクの匂い
枯葉の散る窓辺 学生時代

「軍艦マーチ」はもとより、「ああ、栄冠は君に輝く」の躍動する動的な世界と、なんと対照的なことか。「秋の日」「枯葉」そして「ノートとインクの匂い」。季節は秋、静寂で知的な世界のイメージである。もちろん野球も頭を使うスポーツであり、よくわからないがパチンコも勝つためには考えるのだろう。だが、図書館というと、それと異質な、静寂で知的なイメージがしみ込んでしまっている。

ネットで調べてみると、「学生時代」の発表は1964年、「みんながまだ大学に行く時代ではないから」という理由で、高校生のイメージで作詞したらしい。同じくネットで調べてみると、当時の高校進学率は69.3%でほぼ7割の方が高校で学んだことになる。前

年の63年に舟木一夫さんの「高校三年生」が大ヒットしたのも、こういう進学率が背景にあるのだろう。一方、大学進学率は19%で、2割にも達していない時代であった。その時の歌が、図書館のイメージとして私の中にしみ込んでいる。

ワイワイ図書館

それから半世紀以上の年月が流れ、大学進学率も40%台を越え5割に達しようという時代になった。そうすると、こういう固定観念は「もう古いよ」とばかりに、ラーニング・コモンズ対応の図書館というものが出来た。英語だと何のことかわからないので文部科学省が出している用語解説を参考にすると、複数の学生がパソコンや書籍なども活用しながら自由に学習することができる空間とそれを支えるサービス、ということになる。これに取り組むために、6月から7月にかけて学生諸君にアンケート調査に協力してもらった。そのアンケートの目的の一節、「従来の図書館のイメージや役割から一歩踏み出して、わいわい学習することができるスペースを検討しています」。

資料やパソコンを使用しながら討論や話し合いができるグループ学習のスペース、制作課題など共同で作業できるスペース、プレゼンテーションの準備ができるスペース、飲食や話ができるライブラリー・カフェ、具体的にはこのようなスペースを図書館に置いたらどうかというのだから、「わいわい学習することができる」ワイワイ図書館である。こういうスペースを図書館に設置した場合、活用するという答えがいずれも

60%台を越え、ライブラリー・カフェは77%の学生諸君が期待を寄せてくれた。この期待に応えるよう、努力しようと考えている。

と同時に、サイレント・スペースつまり静寂な空間を図書館に求めているのも事実であった。サイレント・スペースは絶対必要34.6%、やはり必要29.6%、あった方がよい28.4%でトータルすると92.6%の学生諸君が必要性を指摘していた。まさか学生諸君が「学生時代」の歌で固定観念を持つはずはないから、図書館の役割として、静寂さは必要なのである。

つまり、ワイワイと静寂さと、このあい反する要素の両立が必要ということになる。

どうしてワイワイ

学生諸君も図書館に静寂が必要だと感じているのに、どうしてワイワイ図書館など必要なのか。それには大きく二つの理由があるのだろう。一つは、大学の図書館を規定する法律の根本理念、そしてもう一つは、大学教育の国際水準化であろう。

にわか勉強で恐縮だが、図書館法という法律は市民図書館や県立図書館でおなじみの公共図書館のための法律。学校図書館法というものもあるが、それは小中高校の図書館や図書室に関する法律だそうである。それに対し、大学の図書館を規定するのは大学・短大設置基準がメインで、学校教育法施行規則というのが関連する。話がややこしくなってきたが、大学・短大にはこれくらいのスペースと、これくらいの蔵書数の図書館が必要です、という規定である。もちろん、図書館のスペースも蔵書数も、本学はクリアーしている。しかし、蔵書数とスペースがあれば十分、というわけにはいなくなってきた。そこには、オリエンテーションでおなじみの、でも学生諸君にはあまり実感がわかないかもしれないが、しかし大事な話が関係してくる。単位の根本原則の話である。

「大学の単位は、講義・演習の場合、教室内の15時間の学習に対し、教室外での30時間の学習が必要です。つまり、1単位45時間の学習のうち、15時間を教室で行い、そのほかに30時間の自主学習が必要です。大学の単位は、自主学習の時間を含んでいるのを忘れないでください。」学部・学科をとわず、オリエンテーションの時にこのような説明をするはずである。ご記憶にありますでしょうか。

教室外の学習というと、自宅・自室での学習を考えてしまう。だが、この教室外の学習を大学・短大の組織として支えるのが大学・短大の図書館なのである。そして、書籍や参考図書などの印刷物と電子情報を自在に使える図書館にして、教室外の専門的な学習をするのである。これが、法律の根本理念からくる理由。

もう一つの大学教育の国際化、こういうと難しそうだしいろいろな側面があるけれども、学生諸君に即していえば、知識を持つだけでなく、その知識を活用し、

応用し、発信する力を身に付けること、ということになるだろうか。授業も討論や課題解決型など学生諸君の能動的な参加を求める形態が必要になってきた。いわゆるアクティブ・ラーニングと呼ばれるものである。

知識を得るだけの学習ならば、静寂な環境の中で一人である。もちろん、そういう学習も必要である。しかし、それを活用し、応用し、発信するというのは、他者との関わりや共同での学習が必要になる。そういう時間外の学習を、自宅・自室だけでできるものではない。そこで、ワイワイ学習できるスペースが必要になるといえるだろう。

そして、電子機器の発達はおそろしいほどである。私など、本と議論で学んだ気がするが、現在はネットに向かえばたちどころに情報を得ることができる。この便利さを使わない手はない。だが、同時に他の人との接点が少なくなる。それだけに、具体的な人との関わりが求められてくるのだろう。

静かに学び、わいわい学ぶ、そして活用

そうすると、ラーニング・コモンズ対応型の図書館というのは、図書館が学びの質の変化に対応し、学生諸君の学習を支えるためのもの、ということになる。そこで、ワイワイと静寂さというあい反する要素を両立させるとするのは、とても大事なことだと思う。

時代の変化とよくいうが、それにばかり目を奪われると、本質を見失ってしまうことがよくある。みんなでわいわい学ぶことも必要だが、一人静かに学ぶことも必要である。対立的に考えるのではなく、あい反するように見えるものを両立させ、つなげ、循環させることが大事なのだろう。

いきなり古語の話で恐縮だが、和語の「しる」は一つの言葉で二つの意味がある。漢字をあてると「知る」と「領る」になる。後者は、古文の教科書によく載る伊勢物語の初段「昔、男、初冠して、奈良の京、春日野の里にしるよしして狩りにいにけり」と出てくる「領地を持っていて」の用法である。万葉集には、「日知り」という言葉で出てくる。のちに「聖」の字をあてて徳のあるお坊さんの意味に使うが、万葉集では「天皇」の意味で用いている。語源的には、日＝天候に関する知識を持ち、それを活用することで農業の指導ができる人の意味であろう。つまり、「しる」というのは、知識を持ち、それを活用し自在にできることを意味したと考えられる。この古語の持っていた二つの意味の「しる」を、現在の学習に応用することが求められているのだろう。

静寂な環境で静かに学び、共同学習できるスペースでワイワイ学び、そしてそこで得たものを学生諸君が様々な場所で活用する、そういう学習をサポートできる図書館を目指したいと願っている。

図書館学生アルバイトの「私のおすすめ本」

鶴沼千尋（子ども教育学科2年）

「和菓子のアン」 坂木 司 著 光文社 2010.4

みなさんは和菓子と洋菓子のどちらがお好きですか？おそらく、普段は和菓子よりもシュークリームやケーキなど、洋菓子を食べる機会の方が多いのではないのでしょうか。『和菓子のアン』は、デバ地下の和菓子屋を舞台としたミステリー小説です。ひとつひとつの和菓子に込められた物語や歴史を手掛かりにしながら、主人公のアンちゃんがなぜなの答えを考えるように推理をしていきます。

探偵が出てくるようなミステリー小説とは違って、のんびりと謎を解き明かす、ほのぼのとした雰囲気の小説になっています。読んだらきっとあなたも和菓子が食べたくなってしまうのではないのでしょうか。



小野寺光帆（総合文化学科1年）

「百人一首」 名木田恵子 著 岩崎書店 2012.12

私がおすすめる本は名木田恵子さんの『百人一首』です。百人一首といえば、カルタでよくわからない歌という印象が強いですが、この本は百人一首に載っている恋の歌を著者視点からとらえた一つの短い物語です。

歌は詠んだ人によっていろいろな感情が込められています。それが一つの物語に再現されており作家それぞれの個性があらわれていて、おもしろく読むことができます。言葉や言い回しなど難しいですが読んでみると何となくですがどんな思いが込められているか感じることができ、歌に対する印象が変わると思います。百人一首はほとんどが恋の歌です。昔の時代に詠まれた歌ですが現代の私たちと通じる心を持っていることがわかります。昔の人もこんなことを感じていた、思っていたと自分でも感じることができます。

一つ一つは短い物語になっているのでこの本1冊でいろいろな物語を読むことができます。皆さんもぜひ昔の人の心を感じてみてはいかがでしょうか。



今野靖子（総合文化学科1年）

「鹿の王」 上橋菜穂子 著 角川書店 2014.9

私がおすすめる本は、上橋菜穂子さんが書いた『鹿の王』です。この本は2015年の本屋大賞や日本医療小説大賞、また国際アンデルセン賞という多くの賞を受賞しており、読んだことはないけれども、タイトルを聞いたことのある人は多くいるのではないのでしょうか。

帝国からの侵略から故郷を守ろうと戦い、敗北の後奴隷とされてしまった戦士団の頭のヴァン。そして、天才的な医術師ホッサルのダブル主人公で話は進んでいきます。この2人の共通点は“黒狼熱”と呼ばれるウイルスで、数日で次々と人々の命を奪っていく恐ろしい感染症です。生き延びたヴァンと、確かな治療法もない中、人々を助けようと奔走するホッサル。違う視点から見ながらも、確実に真実へと突き進みます。

医療のほかに、帝国という国の成り立ち、そしてその中で生きる人々の複雑さなど数多くの問題も一緒に考えて考えさせられながらも、つい引き込まれます。過酷な運命の中生き抜く勇ましい姿と、人の温かみを感じる本です。ぜひ手にとって見てください。

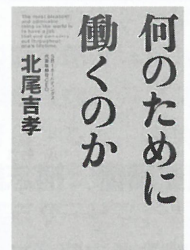


深山 椿（総合文化学科1年）

「何のために働くのか」 北尾吉孝 著 致知出版社 2007.3

私がおすすめる本は、北尾吉孝さんの『何のために働くのか』という本です。この本は、人は何のために働くのか、仕事をするうえで何が大切か。また、人生のありかたなどについてたくさんの言葉で書かれている本です。社会に出る前に学んだものや、社会に出てから必要になること、人間は仕事の中で成長するなどといったことが章ごとに分かれて説明されているので、働くための目標などを学べます。

私は今まで何のために働くのかということあまり深く考えずに生活してきました。しかし、この本を読んで働くことの意味や、これからの人生のありかたなどを学ぶことができ、自分の考えを変えてみようと思いました。働くことの意味がイマイチわからない人はもちろん、働くことの意味がわかっている人も、もう一度働くことについて考えることのできる1冊になっていてとてもためになると思います。ぜひ一度、読んでみてください。



山崎夏歩（子ども学科1年）

「そらまめくんのベッド」 なかやみわ さく・え 福音館書店 1999.9

私は『そらまめくんのベッド』という絵本をおすすめます。このお話はそらまめが主人公という楽しい本です。ふわふわのベッドはそらまめくんの宝物。えだまめくんやグリーンピースの兄弟、さやえんどうさんたちが「そらまめくんのベッドで眠ってみたいな」と言いますが、「だめ、だめ。」と使わせてくれません。ある日、宝物のベッドがなくなってしまう。そこでベッドを探す旅に出ました。

子どもにとって大切な物を貸すということは、私たちが考えている以上に難しいことです。この絵本は、少しずつ段階を踏んでできるようになる過程を大事にしていると思います。また、そらまめくんの住む場所には、どんぐりのコップやアサガオのらっぱ、細かい背景にわくわくがあります。他のまめたちのベッドに寝てみると「小さい」「固い」と困っているところも可笑げだけど、くすくすと笑ってしまいます。これを見ると、お豆の形もさやの形も様々です。こんなところに子どもたちも心惹かれ、興味津々だと思います。きっと読み終えると自然と笑顔になり、幸せな気持ちでいっぱいになります。この絵本だけでなく、たくさんの絵本に出会うきっかけになればと思います。ぜひ一度読んでみてください。



上記の図書は図書館で所蔵しています。ぜひご利用ください。

平成26年度 図書館報告

(東北文教大学・東北文教大学短期大学部)

資料収集

図 書	1, 3 0 1 冊
学 術 雑 誌	8 4 種
新 聞	1 7 種
紀 要	3 7 8 冊
A V 資 料	8 1 点

資料構成 (2015. 3. 31現在)

蔵 書 冊 数	1 2 1, 0 6 4 冊
所蔵雑誌種数	1 5 8 種
新 聞 種 数	1 7 種

利用状況

年間入館者数 (人)	年間館外貸出冊数 (冊)
平成22年度 54, 256	平成22年度 7, 371
平成23年度 35, 270	平成23年度 7, 972
平成24年度 26, 580	平成24年度 6, 881
平成25年度 30, 799	平成25年度 6, 364
平成26年度 32, 550	平成26年度 5, 991

学外者の年間入館者数 (人)	開館日数
平成26年度 176	平成26年度 263日

貸出資料ランキング

〈 図 書 〉

	書 名	著者名	貸出回数
1	はじめて学ぶヴィゴツキー心理学：その生き方と子ども研究	明神もと子／編	62
2	くれよんのくろくん	なかやみわ／著	32
3	フィンランドに学ぶ教育と学力	庄井良信、中嶋博／編	21
4	てのひらどうぶつえん	ハン・テヒ／作、星アキラ、キム・ヨンジョン／共訳	16
5	保育のピアノ伴奏150曲：子どもたちの歌いたうた：保育園・幼稚園の先生の声で選んだ	阿部直美／監修	15
6	たのしくおどろう！DVDつき 手あそびうた	浅野ななみ／監修	14
6	わたしのワンピース	にしまさかやこ／著	14
7	すぐに弾ける子どものうたピアノ伴奏115	安藤真裕子、多田まりこ／編曲	13
7	みんなのパネルシアター：乳幼児から高齢者まで楽しめる	阿部恵／著	13
7	もったいないばあさんのいただきます	真珠まりこ／著	13
7	こどものうた200	小林美実／編	13
7	ピアノといっしょにこどもの定番ソング	ケイ・エム・ピー／編	13
7	楽しみながらからだを動かす 1～5歳のかたんリトミック	神原雅之／監修	13

図書館からのお知らせ

貴重図書『補忘記』の紹介

蔵書者や読者による書込み(「識語」といいます)が、その本にまつわる貴重な情報を私たちに伝えてくれることがあります。

今年度、当館で受け入れた『補忘記』(元禄8(1695)年刊、新義真言宗の論議で用いる語句の発音やアクセントについて書かれた書物)には、「岡村祖嶽」という人物が明治11(1878)年に「伊佐先生」からこの本を譲り受けたことが記されていました。祖嶽についての詳細は不明ですが、書込みの内容をもとに調べたところ、「伊佐先生」とは、幕末期に幕府の役職である下田奉行支配組頭を務めた伊佐新次郎という人物で、対外交渉役として米国総領事タウンゼント・ハリスや唐人お吉とも深い関わりがあった人物とわかりました。

およそ300年前に作られ、伊佐先生や岡村祖嶽、さらに多くの人の手を経て、現在当館の所蔵となった『補忘記』。守り継ぐことの大切さを、私たちに語りかけてくれる気がします。ぜひ、図書館に足を運び、本と語り合う時間を持ってください。

